

地球環境を考える

—「地球憲章」成立の過程を経て—

広中 和歌子

聞き手：佐多保彦 株式会社東機貿 代表取締役社長



佐多：広中さんご夫妻と初めてお会いしたのは、まだ私が20代のころで、ボストンのご自宅を日本山妙法寺のお坊さんのお供でお訪ねしたことがきっかけでした。その後、広中さんが翻訳出版された『40歳の出発』(*1)にも大変考えさせられるものがありました。

広中：私は当時夫(*2)の仕事の関係もあって長くアメリカに住んでおり、当然主婦として普通の生活があったわけですが、子育ても一段落し、さてこれからなにをしようかとふと考えたときに、この本に出会ったのです。人生というのは、学校に行き就職して結婚をして、そして子供を産んで家を買ってと、段々と成熟に近づき、そして人生をある程度上りつめてしまったりあとは下り坂しかない、そのような考え方はおかしいのではないかとという趣旨の本でした。むしろ、ある程度上りつめたからこそ、そこで一度自分の人生をギアシフトしてみる、そうすればまた違う景色が見えてくるのではないかと。私はちょうどそういった不安を抱えてもやもやしている時期でしたから、自分の問題としてこれを受け止めました。自分もこれからでもギアシフトできるのではないかと考えたのです。

佐多：でも、まさか政治家になられるとは思いませんでした(笑)。

広中：周囲も驚いたと思います。ただ、私は終戦を経験しているし、長くアメリカに住んでいたので、政治がとても大切なものだという意識はずっとありました。政治の在り方によって、国民の運命も変われば、国の盛衰も決まってしまう。そのような重要なポジションにお誘いいただいたことは、自分にとって大きなチャンスだったと思います。

佐多：おいくつのときに正式に政界入りされたのですか。

広中：既に52歳になっていました。折しも日本では高度経済成長期がピークに達し、これからどういう方向に進んでいこうかと模索している時期でもありました。そのような中で、私にはなにができるだろうかと考えたときに、環境問題について大きな関心を持つようになったのです。既に有機水銀による水俣病や四日市の喘息などの問題については、様々な対応策が検討されていました。私はどちらかというとアレックス・カー氏(*3)が指摘されているように、住環境の破壊という観点から環境問題に関心を持ち始めたところがあります。また、ちょうどグローバルな問題として環境破壊が取り上げられるようになってきたところで、ゴルバチョフ元ソ連邦大統領が環境問題を通して西欧と対話し、相互に理解を深めようとする姿勢を

お持ちになられたことも一つのきっかけとなりました(*4)。

佐多：そして「地球憲章」作成の作業に関わることになられたわけですね。「地球憲章」について少しお話していただけますか。

広中：環境問題に対して、条約や法令だけでは不十分と考え、人間の考え方や行動そのものを変えるような哲学、倫理観、行動規範が必要だという考え方に立って成立したものです。1987年に、ブルントラント委員会の報告書「われら共通の未来(Our Common Future)」の中で「地球憲章」の作成が呼びかけられました。その後、ブラジルのリオで地球サミットが開催され、「持続可能な発展」が大きなテーマとなりましたが、そのときは発展途上国と先進国の思惑にずれが生じ合意には至りませんでした。しかし、94年に、オランダのルベルス首相の支援のもと、ゴルバチョフ元ソ連邦大統領とリオサミットで事務局長を務めたモーリス・ストロング氏を中心に、世界各国から有識者が招かれ、オランダのハーグで会議が開催されたのです。私は環境庁長官の任期を終えたばかりで時間もあったので、出席することになり、そして最終的には地球憲章起草委員会のメンバーとして「地球憲章」を作成する作業に加わることになりました。世界各地から寄せられた意見を集約しまとめ上げ、2000年6月ようやく「地球憲章」(*5)は正式に発表されることになったのです。現在ではそれを日本に広めるための活動を積極的に行っています。

佐多：PUGWASH会議(*6)では核廃絶問題に取り組んでいますが、そのような問題も「地球憲章」に関わっているのでしょうか。

広中：「地球憲章」というと、環境問題だけを取り上げているように思われるかもしれませんが、実際は平和の問題から人種差別、女性の権利、貧困の解消など、扱っている課題は非常に多岐にわたっていますので、広義の意味では核廃絶の問題も関わってきます。つまり、発展途上国も含めて、先進国がこの地球上で平和に公正に生きるためになにをすべきなのかということを重点的に述べているのです。いわゆる道徳教育のようにとらえられてしまうと反発を買うかもしれませんが、「地球憲章」というのはどちらかというと人間として持つべき価値観、つまりある意味生きるための基礎のようなものなのです。自分の心の中に取り込んで、日々の行いなり、社会の在り方なり、国の在り方なりを考える際に活かしていくことができればよいのではないかと考えています。

東京生まれ。57年、お茶の水女子大学教育学部英文学科卒業後、米國に留学。63年、ブランドイスマ学院文化人類学修士課程修了、87年同大学より名誉博士号受賞。約20年の米国生活の後、帰国後は教育、文化、女性の社会参加などの分野で、講演、対談、翻訳、エッセイなどで広範囲に活躍。86年に参議院議員として初当選し、93年より環境庁長官(堀川内閣)、99年より民主党副代表を歴任。数学者広中平祐氏と結婚、一男一女の母。著書に『ふたつの文化の間で』『政治って意外とおもしろい』、翻訳に『40歳の出発』『ジャパン・アズ・ナンバーワン』『網と武士』など多数。



佐多: 広中さんもご存じのように、地球環境問題の上で一番の公害はまさに「人間」である(笑)。人間がいなければ、地球はさぞかし静かでバランスのとれた惑星でしょうね。

広中: 「地球を大切にしましょう」なんて言いますが、地球はこれまでこれからも人間がいなくてもずっと存在していく。でも人間は地球がなければ存在できませんよね。しかも何千万とある種の中のたった一種の生き物である人間が、地球をめちゃくちゃにしているわけです。人間というものが頭と心のある動物である以上、自分以外の全ての存在に思いやりを持たなくてはならないと思うのです。

佐多: 広中さんが関心を持たれているという住環境の問題に戻るのですが、アレックス・カー氏の著書『美しき日本の残像』の前半部分に書かれているように、日本人に日本の風景写真を見せると「美しいですね」と言うそうです。しかし、一つ一つ、この看板はどうですか、この電線はどうですか、この電信柱はどうですかと指摘していくと、「ああ、確かに言われてみると汚い国ですねえ」という反応が返ってくるそうです。日本人はイマジネーションというか、ある種の「すりこみ」のように日本は美しい国だと思いこんでいるようです。環境問題に対して、日本は他の先進国と比べるとまだまだ教育も行き届いていないし、特にヨーロッパ各国の環境に対する厳しい姿勢を見ると、どうしてこのような問題に対して先駆けのできる国になれないのだろうと複雑な気持ちです。

広中: 私は1980年ごろにアメリカから帰ってきたときに、逆にこの国は「汚いなあ」と感じました。自分の土地であればなにを建てても構わないと言わんばかりに、街全体の調和がとれていないのです。戦前のことを全てよいなんて全く思っていませんが、戦前の日本人はそれこそ向こう三軒両隣に配慮して全体のことを考えていたのではないのでしょうか。それが戦後は戦前を全て悪いと否定することから始まって、その結果残ったものがエゴや物欲だったのではないかと。それが高度経済成長の原動力にもなったのですが、どうも行き過ぎてしまったのではないかと。そのような時代の曲がり角の時期に帰国したせいか、政治の世界に入ったときに一番気になったことが住環境と教育の問題だったのです。また、否応なしに日本が成熟社会に入っていく上で、いわゆる「衣食住」ではなく「医職住」を通して日本人がバランスのとれたゆとりや豊かさを感じられるライフ

スタイルを持てるようなシステム作りが必要だと、強く感じています。

私の実家は世田谷の祖師谷大蔵にあったのですが、小さな農道をコンクリートで埋めて自動車を通れるようになった。当然自動車は道いっぱいに通るので、母が散歩をしていると自動車とすれ違うときは塀に張りつくようにしなくてはならないとよくこぼしていました。自分勝手な国というか、規制に関しては生活者を中心とした視点が欠けているというか……そういう意味で、私のような普通の主婦を経験した人間が政治の世界に入る意味はあるのではないかと、自分では思っています。

佐多: 東京都知事の石原氏が「ディーゼル規制」に乗り出すなど、一面では評価もしているのですが、最近街にカメラをたくさん設置しろとおっしゃっているでしょう。犯罪防止上必要ということのようですが、しかし私にはあれはプライバシーの観点が全く欠けているとしか思えないのです。

広中: そういえば、この7月に長崎県で男児が殺害されるという事件が起きましたよね。私はあれで日本にはいかに多くのカメラが設置されているのか初めて気づきました。カメラのお陰で犯人が見つかったのだからと肯定されてしまう側面があるのかもしれない。

佐多: 欧米ではあのようにカメラを設置して無断で写真を撮ることは人権違反なのです。国家の権利も大切ですが、個人のプライバシーというものも我が国では人権の観点からもっと真剣に検討されるべき課題だと思っています。だから、私はこれをぜひ政治問題として取り上げて欲しいと期待しています。環境面からいっても、至るところにカメラがあるなどというのは異常事態ではないでしょうか。

広中: そうですね。私も住環境の問題について、引き続き真剣に考えていかなくてはと思います。これからも佐多さんのような市民の方から色々な意見を聞かせていただきたいと思います。

(* 1) 原題『Shifting Gears』オニール夫妻著・広中和歌子 現在、絶版。

(* 2) 数学界のノーベル賞といわれるフィールズ賞を受賞した数学者の広中平祐氏。当時ハーバード大学教授。前山口大学学長。

(* 3) 著書『美しき日本の残像』(新潮社)で1994年に外国人初の新潮学芸賞を受賞。

(* 4) リオサミットでグリーンクロス構想をゴルバチョフ氏が提唱し、翌年グリーンクロスインターナショナル(GCI)が発足。ゴルバチョフ氏が初代会長に就任した。

グリーンクロスジャパン(GCI)公式サイト <http://www.gci.jp/index.htm>(日本語)

(* 5) 地球憲章委員会本部公式サイト <http://www.earthcharter.org/>(英語)

(* 6) PUGWASH会議公式サイト <http://www.pugwash.org/>(英語)

秋月禅学と私(4)

—「真空妙用」に生きる— 最終回

竹村 牧男

禅の修行は、坐^ざ禅と作^{さく}務の両輪からなっている。古来、禅林では諸堂や庭の掃除、田畑の農作業、建物などの修理・管理など、さまざまな仕事、それも肉体労働を重視してきた。雲水らの修行共同体を律する規則を、「清規」という。清衆の規矩^{きく}(*)の意であるが、その清規を初めて制定したことで知られる百丈懷海禅師には、次の話がある。

「禅師は年老いてもなお日課の作務を休めてやめなかった。……老^{しん}軀をひさげて孜々として勤勞されるさまのあまりのいたわしさ、もったいなさに、弟子たちが『老師はお休みにしてください』と言うのだが断じてきき入れない。そこで、あるとき弟子のひとりが禅師の作務の道具を隠しておいた。これならいくら老師でも仕事をやめられるであろうと。確かにその日、禅師は作務を休めた。しかし、そのかわりにいくらすめても一日中頑として食事の箸^{はし}を執られなかった。そのときあの有名な一句をはかれた。云く、『一日作さざれば、一日食^{くら}わず』(一日不作、一日不食)』(秋月龍珉『公案』)。

禅では、これほどまでに、働くことを尊重するのである。単に坐禅して瞑想にふけてばかりいるのでは、死人禅として大いに呵せられる。坐禅して、自我に死にきて、身心を脱落したとき、かえって全体作用とも言われるような大いなる働きに自ずから出てくる。禅はむしろそこそそを重んじる。臨済宗では、その働きは、棒・喝のように勇ましく、曹洞宗では、威儀即仏法・作法は宗旨というように行持綿密のありかたに出てくる。いずれにしても、働きのない禅は、禅ではないであろう。

曹洞宗は、只管打坐を標榜し、じっと坐る。面壁でひたすら坐るのである。臨済宗は、公案という修行者への問題を用いて参禅させる。対面形式で坐るが、独参といって師家の室内に入り、一対一で問答して修行していくことも重視するのである。公案には、大体、古来の禅問答『無門関』や『碧巖録』などに収められたものなどが使われるが、日本で作られたものもある。中には、「沖に走っている帆掛け舟を止めてみよう」、「富士山を灯心で結んで、線香でかついで持ってこい」、「春日の局が幽霊を済度するとき、茶碗の中に水を一^{のう}杯入れてみずから箸をぬいて茶碗の上に横たえて済度したというが、衲僧ならどうして済度する」といったものがある。これらは、秋月

竹村 牧男 / たけむら・まきお

1948年、東京生まれ。71年、東京大学文学部卒業。学生時代より秋月龍 老師に参禅する。文化庁宗務課専門職員、三重大学助教授、筑波大学助教授、同大学教授を経て、現在、東洋大学文学部教授。筑波大学名誉教授。居士号・祖珉。著書に、『唯識三性説の研究』、『唯識の探求』、『龍巖と一過』、『良寛さまと読む法華経』、『西田幾多郎と仏教』、『般若心経を読みとく』(今年7月発行)など多数。



龍珉の『公案』に公表された。本来、室内に深く秘せられるべきものを、龍珉は、伝統が喪われるのはあつという間のことだとして、非常な危機感から、公案修行の世界のことを世に広く紹介したのであった。

龍珉によれば、臨済宗中興の祖である白隠に由来する公案体系は、「法身・機関・言詮・難透・向上」とあり、これに「末後の牢関」を加えるという。「法身」は、自己の本性を体証するもの、「機関」は、悟りに腰を落着けず、日常の差別の境涯において順逆二境にさまたげられず、自己と万法(すべての存在)とびたり円融するように工夫する。悟後の修行である。「言詮」は宗旨を言句をもって表現する訓練。「難透」は、透り難い公案のこと。「向上」は、その先ということ、いわば悟り奥さを抜き、修行の跡も払っていくものである。以上のように、公案にも、ただ悟らせるのみのものだけでなく、それを日常に働かせていくもの、言語活動にすら進ませていくものなどがあることが知られるであろう。禅の修行は、そのように、ただ静寂な境地を尊ぶだけでなく、むしろ活発に働いていくことをめざすものになっている。

これらの子細については、前掲『公案』に詳しく記されているので、関心のある方は参照されたい。龍珉は公案を好んで研究した。公案があればこそ、禅の命脈も保たれている一面に留意してのことだった。その著『公案』に鈴木大拙が「序」を贈っている。「秋月君は、この種の公案なるものを、今この書で詮索せんとする。平地に波瀾を起こすどころでなくて、泥沼をかき乱すものと言ってよいかも知れん。考えてみればいらぬおせっかいだ。が、君はこの方面において蘊奥^{うんおう}(*)を尽くした人だから、かくのごときものを著作するにはもっとも適切な論者だと言ってよい。……」大拙一流の濃やかな愛情のこもった文章である。

龍珉と大拙の出会い、終戦までもないころ、東慶寺書院においてであったという。それより以後、龍珉はただひたすら大拙の人と著書にみちびかれて、「禅道」と「禅学」という二足の草鞋をはいて、「禅」という一筋の道を歩んでいったのであった。昭和34、5年頃、大拙が松ヶ岡文庫に落ち着いたのには、ほとんど毎週のように大拙を訪ねて、禅について教を受けたという。それは、大拙への入室(師家

秋月 龍現 / あきづき・りょうみん

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒。同大学院修了。

宮田東照老師、古川堯道老師、宇坂光龍老師、大森曹玄老師に参禅。

埼玉医科大学教授、花園大学教授などを歴任。埼玉医科大学名誉教授。臨済正宗真人会師家として門弟を多数養成。月刊誌『大乘禅』主幹を長らく務める。禅道と禅学とを究め、さらに仏教学・宗教哲学の分野にも活躍した。宗教間対話の促進に努め、晩年は海外の国際集会などにも積極的に参加した。1999年、9月示寂。

著書に『秋月龍現著作集』全15巻、『道元入門』『公案-実践の禅入門』『新大乘—仏教のポスト・モダン』『禅とイエス・キリスト(対談集)』『世界の禅者—鈴木大拙の生涯』『誤解だらけの仏教』『現代(ポスト・モダン)を生きる仏教』『無心と神の国(対談集)』『絶対無と場所—鈴木禅学と西田哲学』など多数。



左から3番目 秋月龍現老師

の室に入って参禅すること)にもほかならなかったという。

龍現によれば、大拙は「真空妙有では未だ^{つく}尽さざるところがある。内の一字を改めもち来たれ。自ら代わって云く、真空妙用」と言ったという。前回、「空」は「自他不二」という話をした。『般若心経』などでは、「色即是空・空即是色」というが、その「空即是色」の色は、真空妙有と言われる。ただの色ではない、空と一体の色であるがゆえに、妙有というのである。しかし大拙は、それではまだ未^{みて}徹^{てつ}在^{ざい}(*)3)である、真空妙用に出てこなければいけないと言う。妙有では、未だ静的・理的であり、思想的にとどまる。妙用として初めてよく動的・事的となり、宗教的たりうるというのである。言うまでもなく、その働きが出てくるのは、空の悟りの中で「自他不二」を自覚しているからである。その自覚から、おのずから他者のために働かざるをえないのである。こうして、大拙はしきりに「用」ということの大切さを説くのであった。

このことについて、興味深い話がある。白隠は、洞山の五位の一句を改めようとした。洞山の五位というのは、今、詳しく述べる余裕はないが、正中偏・偏中正・正中来・兼中至・兼中到という五つの境涯のことで、おのおのに詩が付されているものである。この中、兼中至には、「有無に落ちず誰か敢えて和せん。人々尽く常流を出でんと欲す。折合して還た炭裡に歸して坐す」の詩が付されていた。ところが白隠は、この詩だけはいただけないというのである。そこで白隠があらためて付した詩は、次のものであった。「徳雲の開古維、幾たびか妙峰頂を下る。他の癡聖人を備うて、雪を担うて共に井を填む」。

おそらく、煩惱の世界を解脱して、また生死輪廻の世界にもどってきたとしても、「炭裡に歸して坐す」と、坐してじっとしているだけではだめだというのであろう。そこで白隠は、修行の跡も消し去って、とがったところもまったくなくなった境地にある者が、その利害打算を超えた立場から、報いを求めずに黙々とひたすら働きつづけるあり方こそ、兼中到という至高の境地にふさわしいと見たのであろう。

この白隠の話を、大拙は非常に評価するのであった。大拙は『中庸』に出る「君子の道は、費にして隠」という言葉をとりあげ、龍現に語る。「ところでわしにはわしの解釈があるんだがな。それは『費』

は作用で、はたらきだ。君子の道は『真空妙用』^{じやくご}、やってやってやりぬく働きの所にある。いつもいう白隠の『他の癡聖人を備うて、雪を担うて共に井を填む』^{じやくご}だ。五位の兼中到の著語(*)4)にこの句をおいたのは白隠の大見識だ。そしてそれは禅者のいう跡を払え跡を払えだ。『羚羊角を掛く』という句があるだろう。君ら室内で著語におかなんだかな。シナの人がきたら、わしのこの解釈、ひとつ意見を聞いて見ようと思うが、君はどうだ」。

さらに大拙は、「ただ滅茶苦茶に働くのだ、働いて働いて働きぬくのだ。その意味でわしは、白隠禅師が五位の『兼中到』に著語を置き直した見識を高く評価したい。外のことはともかく、あれだけでも白隠は偉いと思う」とも語るのであった。(『秋月龍現著作集7』鈴木禅学入門)

大拙の薫陶を受けた龍現が、真空妙用をしきりに語ったことは言うまでもない。それは龍現独自の言詮によって表現されたわけではなかったが、龍現の禅学の根柢に厳然として存在していた。いや、何よりも龍現は、真空妙用に生きていた。京都花園大学の講義の帰りに、その足で都内で禅会を主宰するなど、文字通り東奔西走の生涯、働いて働いて働きぬく生涯であった。まさに禅将の面目躍如であった。

(*)1) きまり、規則のこと。

(*)2) 學術・芸道などの奥深いところ

(*)3) まだ徹底していない、完全でないという意味

(*)4) 公案の見解などに対し、その心を表す短い語句を選んで示すこと。著語とは、語をおくという意味

シャントと共に生きて

—患者体験談—

石塚 裕也

私は幼稚園の卒園間際であった5歳のときに交通事故に遭い、すぐに市立越谷病院に搬送され、検査を受けることになりました。結果はクモ膜脳腫を起こしているということでしたが、手術をしなくても一生を平穩無事に過ごせる可能性もあることや、私がまだ小さかったこともあり、手術をするかどうか担当医や家族も悩んだそうです。しかし、将来的にクモ膜脳腫は脳内出血などを起こしやすいということがあるため、相談の未入院して手術を受けることが決まり、圧固定式のシリコンのシャントチューブを埋めることになりました。

うまくシャントも適合したのか、その後は何事もなく過ぎ、高校2年生になるまでは、シャントを入れているからといって特に注意して生活することもなく、むしろシャントを入れていることすらすっかり忘れて普通に高校生活を送っていました。

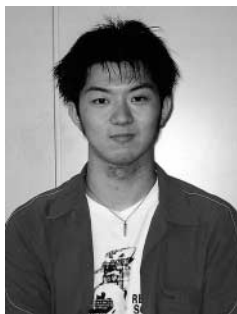
ところが、高校2年生に進級したころから頭痛が頻繁に起こるようになり、特に昼過ぎになると痛みは耐え難いほどで、保健室に行っては薬をもらってベッドに横になっているという生活がしばらく続きました。そうこうするうちに、当時水泳部に所属していたのですが、大会のあったその日にあまりに具合が悪くなり、これでは参加は無理だということで試合を棄権して帰宅する途中、頭痛のために乗っていた自転車ごと倒れ、救急車で病院に搬送されるということがありました。

そのときは、筋肉性の頭痛ではないかと診断され、1カ月ほど自宅療養をしていたのですが、一向によくなる気配がありませんでした。私は倒れたときから、「これは幼稚園のときのことが原因なのではないか」と感じていたので、それを病院側に告げ再検査をしてもらったところ、体がシャントに依存してしまっていて脳脊髄液を自分で吸収しなくなってしまう、水頭症を発症しているということが判明しました。既に脳圧が高くなっていてあぶない状態だということがはっきりしましたので、1カ月間は腰椎にチューブを通して脳脊髄液を体の外に流すという処置をとり、その後、手術に踏み切ることになりました。それ以降、市立越谷病院の角田先生のお世話になっています。

手術自体は大したものではありません、終わって1週間もすれば抜糸できるようなものだったのですが、何度もシャントが詰まってしまって、結局計3回も手術を受けることになりました。初めのうちは、体への侵襲の度合いの少なさも考えて、こちらのほうが体によいだろうとL-P

石塚 裕也 / いしづか・ゆうや

1981年、埼玉県生まれ。2003年、専門学校を卒業し、診療放射線技師国家試験に合格。現在、放射線技師の仕事に就くべく、就職活動を行っている。



シャント(*1)を試したのですが、2回とも詰まって失敗してしまっただけ、3回目に(株)東機貿が開発販売しているソフィサ社製の圧可変式バルブ(*2)を埋め込むことになりました。幸い、この手術は成功し、無事退院することができたのです。

高校2年生の2学期をほぼまるまる休学してしまったので、進級できるかどうかおぼつかなかったのですが、担任の先生や水泳部顧問の先生のご尽力で、なんとか無事3年生に進級し復学できることになりました。時々頭痛はあったものの、高校生活は順調に送ることができました。

そして大学進学を考える時期になったころ、やはり自分が病気になる経験を活かせるのは医療系しかないと思い、また当時東海村の原発事故の問題から放射線に関心を持ったこともあって、放射線技師の養成専門学校に3年間通うことを決意しました。学校では、時々頭痛のためにテストを受けられないなどのハンデがありましたが、臨床実習のときには腰椎穿刺を受けている患者さんの気持ち痛いほど分かるなど、他の学生とは違った視点で学校生活を送れたことは、とても意義があったと感じています。

ただ、今年の2月下旬からしばらく頭痛がひどかったため、検査入院を繰り返し、病院のベッドを確保しながら学校に通うという日々が続きました。そのようなときでも、私はよく周囲に「患者の気持ち分かる放射線技師になってみせる」と言っていた覚えがあります。手術、入院、検査など、一通り色々なことを経験してきたので、やはり患者さんの気持ちはよく分かります。そこくらいは他人よりも一歩秀でていると考えぜひ活かしてみようではないかと、強く心に思ったのです。こうして、なんとか学校も卒業し、無事国家試験にもパスすることができました。

また、こちらの(株)東機貿の佐多社長が「医療機器を愛してください」というキャンペーンを展開していると知り、私はとても共感を覚えました。

専門学校に通っていたころ、担任の先生が「医療機器はちゃんと愛してあげないと動かないんだよ」と言っていたことを思い出しました。確かに医療機器あつての放射線技師ですから、そういった意味での



高校の文化祭にて

発言でもあったのかもしれませんが、実際臨床実習中にリニアックから電子線が出なくなってしまうというトラブルが起きたときに、「もう少し頑張ってくれよ」と何度か声をかけると、不思議に動くようになって、ああ本当のことなんだなあ実感したという経験もあります。

また、私自身についても、シャントに心の中で語りかけるということをよくしています。頭痛がすると、「シャント君、ちゃんと動いてよ」と念を送ります(笑)、外出中に頭痛が起こったりすると「俺がまず頑張って駅まで行ったら、駅まで行ったら今度は君がちゃんと動いてくれよ」と話しかけたりもします。でもそうすると、不思議と痛みが楽になったりするときがあるのです。シャントなしでは普通の生活が送れないわけですから、常にシャントは私の意識にあり、またシャントがあつてよかったなあと感じることが日常生活において多々あります。

病院と相談した結果、今後の計画としては、シャントの圧を変えながら自身の治癒能力を向上させ、元の体に戻すということです。シャントはそのような意味でも私の人生にとっての相棒であり、また案内役のようなものでもあると言えるでしょう。

それ以外にも、やはり病気をして意識が変わったと感じるときがあります。高校生のときに手術を受けた際、何回手術をしてもシャントが詰まって失敗してしまうので、このままでは治らないのではないかと死ぬのではないかと本気で心配したことがあったのです。そのときに、なにかの本を読んで「死にざま」というものを強く意識するようになりました。

以前はどちらかというと引っ込み思案で地味な性格だったのですが、どうせ死ぬならやりたいことをやって死のう、笑って楽しく過ごして生きようと、どこか吹切れたというか、自分の意識が変わったなということを感じました。これも本で読んだのですが、その中の一文に「人間は一生で二度死ぬ。一度目は肉体が死んだときで、二度目はその人のことを覚えている人々がなくなったときだ」というものがあって、心にとでも残ったのです。それならば、よい意味で、周囲の人の印象に残るような人間になりたいと思うようになりました。自分も笑って笑って、そして人を笑わせて生きてみよう。

病気になったばかりのころは、病気のことを隠していたのですが、今は話のネタにもできるくらいです。よい意味で一線をひいてしまっ



ソフィサ社製 圧可変式バルブ

たというか、世の中には病気をする人としらない人がいて、私は病気をする側なのだから、それではいっそその人生を思いっきり楽しんで過ごそうではないかと考えられるようになったのです。

しかし、色々苦しいことや辛いことはあったものの、やはりここまでなんとか無事に過ごしてこられたのは、両親や市立越谷病院の角田先生、そして今私の頭の中で必死に動いてくれているシャントバルブのおかげには違いありません。なかなか言葉にすることはできないのですが、いつもみなさんには心の中で感謝しています。

これからもまだまだみなさんの協力を必要とするかもしれませんが、放射線技師として無事就職を決め、そして患者さんのために一生懸命働いていければと思っています。

最後に、今回このような紙面をお借りし、体験談を掲載させていただいたことを大変感謝しています。今後も、(株)東機質には、より一層充実したシャントバルブの開発をお願いし、また私のような水頭症患者のために頑張っていたいただきたいと思います。(株)東機質のますますの発展を心より祈念いたします。

(* 1) カテーテルを腰椎・クモ膜下腔内に挿入し、腰椎クモ膜下腔から腹腔内に脳脊髄液を排液するというシャント法

(* 2) 1985年にソフィサ社が開発した、世界初の埋め込み式の圧可変式シャントバルブ

オランダの花を届けたい

—自然に優しい花の栽培を目指して—

奥津 勝美

聞き手：編集部

— 弊社では毎年、社長の発案から社員とその奥様方に奥津様が経営される東インド会社より誕生日花を贈るという慣習が続いており、その関係で貴社とのお付き合いも既に20年近くになります。

18年ほど前に日経新聞にベンチャー企業を紹介するという特集が組まれ、弊社も紹介されたのです。それを貴社がご覧になられてご連絡をいただき、それ以来お付き合いをさせていただいております。「生命力」を経営理念に掲げる社長様らしく、社員の方にお花を贈られるという発想はすばらしいなあと思いました。

— 大学在学中にフラワーデザインの専門学校を卒業されて、翌年には会社を設立されていたのですね。

大学入学時は、日本語の先生になろうと考えていたのです。それが次第に自分には向いていないのではないかと悩み始め、そこで自分はなにが好きなのだらうと考えたときに、それが花だったのです。そこで、体系的に花のことを学びたいということで、大学在籍中にまだ当時珍しかったフラワーデザイン専門学校に通い始めたのです。そして翌年には株式会社カロンフラワープロジェクト(現東インド会社の前身)を設立し、独立を果たしました。

— なぜオランダの花を中心に輸入しようと考えられたのでしょうか。

チューリップの栽培も400年以上行っていますし、航空運賃のレートが優遇するなど、国全体で花産業を全面的にバックアップしている国ですから、やはり花の業界ではオランダは非常に有名な国なのです。また鎖国前後の外交史にも関心があって、色々和本を読んだりもしていたので、そういう意味でもオランダは私にとって特別な国でした。そこでぜひ現地を生で見てようと、会社を始めて5年目の節目に記念としてオランダに行くことを決めました。

— 実際に行かれてみてどうでしたか。

まず市場の規模が半端でない大きさですし、集まってくる花の種類もとにかく多く、圧巻な眺めでしばしば呆然としてしまったほどです。また花によいと思われることはなんでもやってみる国なので、花を効率よく持たせるための研究など大変科学的に行っていて、当時の日本と比べると随分進んでいました。オランダ人は商売人として非常に合理的で、無駄なことは一切しない民族です。

— 最近オランダでは「環境保全型農業」に力を入れているそうですね。

国として環境をきちんと考えなくてはいいなと考える側面と、オランダ最大の花の輸出先であるドイツというのが非常に環境に熱心



奥津 勝美 / おくつ・かつみ

1954年、神奈川県生まれ。77年、慶応義塾大学文学部卒業、在学中にフラワーデザイン専門学校も卒業。翌年、東京都港区に株式会社カロンフラワープロジェクトを設立し、花店を始める。83年に有限会社東インド会社を設立。オランダを中心とした輸入花の販売を開始し、個人向け通信販売と法人向け販売を主に手がける。92年に同社を神奈川県平塚市に移転、現在に至る。

な国なので、商売相手に対してきちんとなさなければならないという側面の2つがあり、そこからそのような発想が生まれたのだと思います。

— 具体的にどのような方法を探られているのですか。

まず「養液栽培」です。土で直接栽培せずに、人工土に液肥をコンピューター管理で与えて栽培する方法のことです。そしてそこで出た廃液は回収を義務づけて再処理し、リサイクルしています。この方法ですと、花栽培の人工管理ができる上に、土で直接栽培しないので害虫がつかないため、輸出時に検疫にひっかかるというリスクを避けることができます。またオランダは九州と同じ程度の国土面積ですから、土を汚染しないためにも廃液リサイクルは非常に効果的です。

— そしてあわせて「減農薬」も行っているそうですね。

食べ物でないので、一般に話題になることは少ないのですが、花への農薬の使用量は決して少なくありません。特にバラなどはとても病気になりやすいので、殺虫剤、殺菌剤の宝庫です。オランダも以前は農薬を随分使っていたのですが、前述の通り、輸出先のドイツがそういうことに関して厳しい姿勢で臨んでいるということもあって、早急に花栽培の減農薬化を進めました。そこで採用されたのが、ハチ、ダニ、ハエ、カメムシなどの生物農薬を使って害虫を駆除するという「天敵農薬」です。その結果、農薬使用量は1995年には50%、2000年には65%もの削減を実現しました。

— たった数年の間にそこまで減農薬を実現されたのですか。

オランダはやると決めたら徹底的に行う国なのです。オランダは安楽死を認めていたり、麻薬の問題についてなど市民の政治に対する参加意識が高いという側面と、海より低い土地が半分以上の国ですから昔から治水に苦勞し、自然と折り合ってきた歴史があり、色々な問題に対してうまく折り合いをつけていくという国民性があるようです。できることはすぐに実行し、将来的にプラスになることはシステムティックに実現していく姿勢があると思います。そういうオランダ流の考え方が、減農薬の迅速な実現にも影響したような気がします。

— 実際にオランダの花を輸入する点で苦勞されていることはありますか。

現在輸入に関しては、日本人の検疫官がオランダに常駐していて、向こうで大丈夫とされたものは成田ではほとんどフリーパスになって



コーディネート例



低農薬コチョウラン



いますので、特に大変ということはありません。そういう条件が揃っていない国の花は、成田で検疫に引っかかるかとガス室で蒸されてしまったりますのですが、オランダの花に関してはそういう意味でもまず問題がありません。それもまた、オランダのルペルス元首相が15年ほど前に来日された際、日本に圧力をかけて日本人検疫官の常駐を認めさせたそうです。そうすれば日本にたくさん花が輸出できるようになるでしょう。そこからも分かるように、とてもシステマチックに戦略を練る国なのです。

ー 今後花販売を続けていく上で、目指すべき方向性などがありますか。

以前は、日本にない花を紹介したいという気持ちで仕事をしましたが、今は色々な意味でオランダ人の考え方に共感を覚える部分が多く、だからこそオランダの花を紹介していきたいと思うようになりました。個人のお客様でも弊社のお花が特に欲しいと言ってくる方もいらっしゃいますし、また通年でオランダの花を扱う会社はほとんどありません。輸入の切り花はオランダとオーストラリアとニュージーランドからのみなのです。もちろん、日本の市場に行って買ってくることもできますが、やはりその場合どうしても個性がなくなってしまうからです。

ー 最近では「低農薬コチョウラン」に力を入れているとか。

オランダの生花を中心に仕事をしますと、どうしても低農薬ということが気になってしまい、特にランは一本の花茎に少しでもたくさんの花をつけさせるためにホルモン剤などが多用されていて、きれいな花は咲かせますが根が弱ってしまうので持ちが悪いという欠点がありました。花だけでなく根まで元気に長持ちするコチョウランを作れないかということで始めたのが「低農薬コチョウラン」です。また、コチョウランはバブルのころまでは超高級品として取り引きされていましたが、カジュアルに使えるコチョウランが作れないものかとも考えていました。今では5000円ほどのコチョウランでも十分に楽しめます。

ー それもホームユースの花を大切に使うオランダ人の発想からきているとも言えますね。

そうですね、オランダのホームユースの花の量は日本の4倍ですから。ただ、販売額だけで言えば日本とそう変わらないのです。日本では花はどうしても贈答品や仏事などを中心とした装飾として使われる割合が大きいので、単価が大きくなってしまいうからです。オランダでは、家に飾る花を買う花屋と、贈答用の花を買う花屋とは厳然と区別されています。オランダ人が家庭で楽しむものは日本人の感覚からすると品質的に日本では受け入れられないクラスの場合もありますが、無理をせず大量につくったものですので、価格も安いですし、家庭用としては十分です。オランダでは、ちょっと病気になっていたり、虫に食われていたりしても、極端に消毒して花や地球に負担をかけるよりは、家に飾るのだからこれくらいでよいではないかという社会通念があります。日本人はどうしてもまだまだそういう意識が弱いので、私たちが日本人に売るのは特級品に限られてしまうというのが現状です。

ー 奥津社長は「花のソムリエ」もされているとか。

「ソムリエ・ド・フルール」は「花のソムリエ」として商標登録もしています。私が仕事の上で一番大切にしていきたいことは、法人相手でも個人相手でも、花を使われるときに、どのような花を使うのか、どのような花をどのような形で使うのか、そしてその花にはどのようなメッセージを添えるのか、そういったことを総合的にコンサルティングしていきたい、そうして的確に花を使っていけるように花を提供していきたいということなのです。

ー 奥津社長は「花のソムリエ」もされているとか。

ー 最後になにがメッセージをいただけますか。

花は衣食住と違い、なくても生きていく上では困らないものですから、自然を壊したり花に負担をかけてまで成立させる産業ではないと考えています。花に関して仕事をしている者は、「人間」と「自然」の間というものを、花(植物)を通してみなさんに気づいてもらうことも、また花のすばらしさを伝えると同時に大切なことではないかと思っています。貴社が医療機器を通じて「生命力」を経営理念として掲げていることと共通する部分があるのではないかと勝手に考えています。貴社の場合は「人間」と「生命力」の間とでもいうものなのでしょうか。関係という言葉だけでは表現できない、なにか繊細で大切なものを感じるのです。

ー 最後になにがメッセージをいただけますか。

弊社は社訓として「シンプル、上品、やや高級」を掲げているのですが(笑)、今後この考えを大切に仕事をしていきたいと考えています。

お問い合わせ

東インド会社 湘南メールセンター 担当:奥津

〒254-0062 神奈川県平塚市富士見町8-56

TEL 0120 03 5593 FAX 0120 03 6920 E-MAIL info@tulip.co.jp

▶ 東インド会社ホームページ <http://www.tulip.co.jp>

出会い(27)

いちばんいいもの

奥村 一郎



洗濯機

奈良に薬師寺という名刹がある。そこから出ている『薬師寺』と題する機関誌に、NHKテレビの「百点満点」で活躍中の田畑彦右衛門さんの次のような話が載せられていた。

我が家の旧式電気洗濯機が、この間ついにダウンしてしまった。手しぼり式の古い型とはいっても当時の「暮らしの手帖」の推せん品だけあって12年間もがんばってくれたのだが、よる年なみには勝てず、全自動式の新型と交替することになった。「スイッチ一つでしまいまで手がかからなくなった……」と家内が、ホッとしたのは当然として、小学生の息子までが「こんなボロ機械がいままであったのがかっこうわるいや」という顔つきであった。

ところが電気屋さんが新しい機械を持ってきて、古いのを持って帰る時、ふと私が「こいつはずい分お前のおむつを洗ってくれたんだぞ」と言うと、息子の態度が急に変わって何だか持って行ってほしくないような顔になり、最後に洗濯機に向かって「ありがとう」とさえ言ったのである。（『薬師寺』第13号 昭和47・4・1「私たちは生き残れるか」）

とても考えさせられる話である。「もったいない」という言葉がいつのまにか消えてしまった「使い捨て文化」とか、「消費社会」と言われる現代人の心の病が、そこに実によく表れている。戦後日本のめざましい復興は賞されてよいことだが、いつのまにか能率主義と功利主義が日本人の心をむしばんできている。役に立たない人間、成績のあがない人間は、ポンコツの洗濯機のように粗大ゴミとして捨てられてしまう、怖い今の世の中である。

ここで、この子どもは私たちに二つのことを教えてくれる。一つは、大人が作った現代の荒れた世相の第一の犠牲者は子どもにほかならないということ。第二は、父の一言でめぐりに回心する子どものすばらしい単純さ。やはり天国に入るには、こんな幼子のようになることが必要なのだろう。（マタイ18:3 19:14）

中国の古語に、「玩物喪志」という言葉がある。物をもてあそばせば、「志」、すなわち正しい心構えを失うということである。物質の氾濫は、精神の荒廃をもたらすとも言われる。先進国と言われる日本の現代病の一つである。また、「玩物喪物」というおもしろい言葉もある

（『近思錄』）。物をもてあそばせば、心どころか物そのもののさえだめになる、ということである。飽食時代と言われる日本では、食べ過ぎて心が鈍るだけでなく、体までこわしてしまふ。拒食症などというような奇病さえも出てくる。農薬や着色剤で食べられるものささが食べられなくなる食品公害も、その矛盾した一例である。

それに、物はただ理にかなった使い方をするだけではなく、物に心を通わせることが大切である。あの坊やお父さんの一言で思わず目が開かれて、死体のように持ち去られていくポンコツの洗濯機に「ありがとう」と言った。すばらしい子どもの回心の素直さである。目に見えない心の世界が、突如まばゆく見えてきた。過ぎ去った年月と、そのあいだに働いてくれた洗濯機、また、それを動かして働いてくれた母の愛に対する感謝の心でいっぱいになった。少しおおげさに言うと、「歴史の重み」、さらには「神の愛の重み」と言えるものを、ずしんと感じたにちがいない。

目に見える物の中に隠されている、目に見えない世界を見ることこそ、人間の偉大さである。「大切なことは目に見えないんだよ。心で探さない」と言ったのは、サン・テグジュペリの「星の王子さま」である。

カミソリの刃

切り抜きのスクラップも見つからないので、言葉どおりに思い出すことはできないが、もう何年も前のことである。確か、『朝日新聞』の朝刊の「声」に寄せられた一文。「カミソリのように」という見出しだったように思う。年齢も記してあったが、とにかく若い理容師さんの、ごく短い投稿で、およそ次のようなことが書かれていた。

「よく“カミソリのように鋭い”とか、“カミソリの刃のようによく切れる”とか言われますが、私たち理容師を職とする者にはあまりうれしい言葉ではありません。ひげそりに使う日本カミソリは、確かによく切れる鋭い刃にはちがいがありません。しかし、理容師にとって大切なことは、カミソリの刃の当て方が柔らかく、そして温かく感じられることです」

とてもよいことを教えられたようで、うれしくなり、今もしばしば思い出される言葉になった。頭や口の鋭い人は、人を傷つけやすい。ほんとうによい頭、よい言葉には、柔らかさと、ぬくもりがある。

少し角度が違うのかも知れないが、これと合わせて思い出される『徒然草』の言葉がある。「よき細工は、少し鈍き刀を使うといふ。妙観

48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリックのカルメル修道会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年より2001年までバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。現在、京都聖母学院短大名誉教授。

著書に、『祈り』『断想』『神とあそぶ』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンズ宗教研究所)、『祈りの心』(海竜社)など多数。

が刀はいたく立たず』。(二百二十九段)

少し鈍ければ、力を入れ、ていねいに彫れるということなのか、あまり鋭い刀は思わす切り込みすぎてしまうということなのかもしれない。あるいは、鋭い刀を柔らかく用いる心の技とでもいうのだろうか。

いちばんいいもの

みんなで いちばん いいものを

さがそう

そして ねうちのないものに

あくせくしない工夫をしよう

八木重吉

かつて、東大宗教学科主任を務めておられた岸本英夫教授は、日本の社会を評して「幸福そうに見える世界」と言った。天皇をめぐるテロ行為、いじめの心理に病む教育の荒廃などと言いながら、まずまず世界での理想的安全地帯になっているのが今日の日本である。地上天国の八分どおりはできあがっている、というのだろうか。科学は進み、宗教も新業のようにあり余るほどあって、心身のバランスをとっているおもしろい社会でもある。

よいもので満たされている幸福な社会。だが、何かが欠けているような気がする。「幸福そうに見えて」、ほんとうは幸福ではないのかもしれない。というのも、「よいもの」でいっぱい、そのために「いちばんいいもの」が見えなくなっているのでは、と思うこのごろである。

井の中の蛙

「井の中の蛙、大海を知らず」という耳なれたことわざがある。小さな世界に閉じこもってしまっ、広い外の世界を知らない、ということ。管見とか、狭量ということも、それに通ずる言葉である。ところが、最近おもしろいことを聞いた。「井の中の蛙、天を見る」と。まことにみごとに換骨奪胎の背面の論理である。「天」と言えば、「神」にもなる。それは「大海」よりも大きく、さらに広い。たとえ小さな孔のような井戸から見上げるにしても。

このごろの人間は、まだ見ぬ大海にあこがれて、浮かれ出る蛙のようなものになってしまったのかもしれない。特に、長いあいだ島国

に閉じこめられていた日本人の場合はじっと井戸の中にいて、天を見つめる蛙がいなくなった。ひょっとしたら、そんな蛙が、やがて大海原を舞う白鳥に生まれ変わるかもしれないのに。

どの社会、どのような場においても、しよせん、人間の住むところは狭苦しい井戸でしかない。地球狭しとばかり、とびまわっている日本人でありながら、天を見ないで井戸の壁ばかり気にしているからなのだろう。そんなことから井戸の壁はますます狭くなり、押しつぶされそうになって騒ぎまわるのが人間である。

いつか、お菓子の包み紙を開いたら、「一壺天」と書いてあった。心にとらわれがなければ、小さな壺も天のように広くなる、とか説明があった。一つの果てしないもの、それを見つめて生きることこそ、無限に多様な世界に生きる秘訣なのであろう。

「一を抱いて天下の式となる」、中国の古聖、老子の言葉である。

(『老子』第28章)

女子パウロ会『断想』より一部転載

表紙の言葉



モスクにてコーランを読む老人

「...当のモスクは見えている。わたしたちにはどの道を行けばいいのかわからない。...登校途中の制服姿の子どもたちにまじって歩いていく。近代的な世界だ。モスクはきれいで明るくて優雅で、さまざまな色合いの丸天井がいくつもある。朝の光のなかに浮かんでいるように見える。遠くから見ると、まさにモスクがあるべきイメージの通りだ。...」

『アフガニスタンの風』ドリス・レスリング
(晶文社刊)より

写真: フランコ・マン
ペンタール、バキスタン 2001年

- * モスク: 正しくはアラビア語で「マスジド(masjid)」といい、「平伏する場所」を意味する。イスラム教は、偶像崇拝を厳しく禁止しているので、モスクの内部には神の像や祭壇などはなく、ただ礼拝はメッカの方向を向いて行われなければならないため、その方向を示す「ミフラーブ」という龕(がん)が造られ、そのわきには説教壇(ミンバル)とコーランを置く書見台が設けられている。モスクの入口や中庭には、礼拝前に身体を浄めるための水場や、のちには付属建築として外郭に礼拝の時間を告げる数個の尖塔(ミナレット)が建てられた。

“ Je le pensay, et Dieu le guarit. ” われ処置し、神これを癒したもうた — Ambroise Paré(アンブロアズ・パレ)-

米川 泰弘



米川 泰弘 / よねかわ・やすひろ

1939年、三重県津市生まれ。64年、京都大学医学部卒業。京都大学医学部助教授、国立循環器病センター・脳神経外科部長などを経て、93年より、チューリッヒ大学脳神経外科主任教授。
▶ チューリッヒ大学病院 <http://www.usz.ch/>

前回の稿で、もう絶望的かと思われた患者さんが長期に集中治療室で治療された後回復して、私どもその喜びを分かち合えることがある、と述べた。そういうケースの一人で、術後に実に多種多様の合併症を経験したにもかかわらず自宅に帰ることができ、最近再び全く通常の生活を享受することができるようになった人を紹介したい。

昨年の初夏、重症のくも膜下出血が原因で急速な意識障害と左の片麻痺を発症し、緊急搬入されてきた主婦のRさん(45歳)である。中大脳動脈にできた動脈瘤(2cm)が破裂したもので即緊急手術となった。術中に私は、中大脳動脈のこの大きさの動脈瘤のクリッピング根治術のためにはバイパスの手術も加えて必要になるであろうと予想したが、その通りの展開となった。片麻痺の原因である脳内出血も除去し、手術は成功裏に終わった。

ところが問題は手術室を引き揚げてから後に始まった。思いがけない内臓系の合併症が続出したのである。まず胸水がたまり、それを胸郭ドレーナージで処置。その際に起きたと思われる肝損傷治療のためにやむを得ぬ開腹手術。これを執刀した内臓外科医の手術記録によると、出血がひどく止血布を腹腔内にしばらく留置せざるを得なかったそうである。やがてその布を取り出すための再開腹手術がすんでこれに関する問題は一応収まった。が、次には麻痺性のイレウス(腸閉塞)を治療経過観察している間に、腎臓の動脈に動脈瘤が見つかり、大きくなっていくのがわかった。これは細菌性の動脈瘤であろうとの診断で、抗生物質投与とヘパリンの抗凝固療法が行われた。その経過中に、ある日突然、脾臓からの出血による出血性ショックに対する再々開腹手術が必要になる、などなど…。この期間本人は脳神経外科の集中治療室と内臓外科の集中治療室を頻りに往来せざるを得なかったのである。幸い自然の摂理なのか、このような合併症が次々と起こっている間Rさんの意識は朦朧状態であったが、やがて次第に意識がはっきりしてくると自分に何が起きているかが把握できるようになって一時的に急性精神病状態をきたし、精神神経科の治療までも必要となったのである。

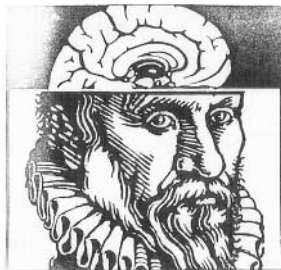
長い間の集中治療室の治療(当科では2カ月余り)の経過中に、当初の問題であった左の片麻痺はほとんど治癒回復した。この時点で内臓外科に転科し、その後リハビリを経てかれこれ1年余りも続

いた闘病生活についてピリオドを打って帰宅することができ、本人から喜びの報告が届いたのである。まさに、死の淵からの生還といえる。

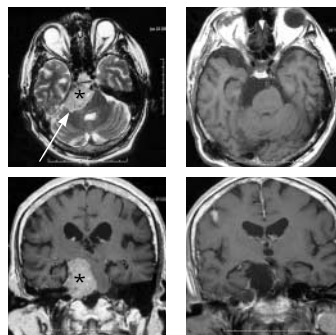
一方次のような大変残念なケースもある。患者はやはり主婦のMさん(54歳)で、最近急速に視力が落ちてきたので検査をすると、視神経を圧迫して大きくなっている頭蓋咽頭腫が見つかった。頭蓋咽頭腫は良性腫瘍に属するものの、視神経、下垂体、視床下部、脳幹などの重要な組織、それらに栄養を運ぶ重要な血管に密着してでき、また時にはこれらにしっかりと癒着しているため摘出手術の際は極めて注意深く剥離して処理する必要がある。脳神経外科領域では最も難しい手術の一つであり、術後の管理も含めて、非常に難しい病気とされている。この主婦の場合はすべてが首尾よく運び、術後視力も急速に回復し、1週間余りで喜びの退院となった。

しかししばらくしてその夫から手紙があり、妻が突然肺塞栓で亡くなったので驚き悲しみ、途方にくれているとの内容であった。術後3週間であった。確かに欧米人の場合、日本人に比べて肺塞栓は術後に多い合併症の一つである。ほとんどが長時間の臥床の際にできる下肢の静脈血栓が離断して塞栓子となり、それが血液で運ばれて行った末、肺動脈血管系を閉塞するものである。そのためこちらでは術後早期に理学療法を開始し、また早期離床させ、歩行練習を行ってその発生を防ぐように努めている(注:長時間の飛行中に座席にじっと座ったままでのために起きる“エコノミー症候群”と呼ばれているものは肺塞栓である)。それにたとえ術後肺塞栓が起きることがあっても数日以内(従ってまだ入院中)に発生するのが普通で、しかも命を落とすような重篤な肺塞栓はまれである。彼女の場合は術後の経過も順調で、翌日から歩行練習を開始し、よく体を動かしていたので、離床が遅れる患者に通常行う血液を薄める抗凝固療法も必要ではなかった。本人も家族も退院を喜び、見送った治療チームも安堵していた矢先だけに、驚きと無念の思いで私も慰める言葉がなかった。

さて一般にこちらでは朝の始業時間はとても早い。私の場合、5時半に起床して6時過ぎには家を出る生活を既に10年続けている。毎朝7時半からは早朝連絡会を行って約30分間で必要事項を連絡したり話し合う。平素、規律を重んじており、遅刻や理由のない



Ambroise Paréの肖像を用いた没後400年祭のシンボルマーク
(1990年の日本脳神経外科学会招待講演集[中村紀夫会長]の中の大村敬郎先生の論文より)



A. 術前

B. 術後

脳幹部に接して発生した岩様脊髄鞘内腫。このような手術の成功には、マイクロサージャリーの技術にくわえて、的確なアプローチ、術中の脳神経モニタリングが重要である。

↑ はアプローチを示し、
* は腫瘍を示す。

欠席は厳禁である。私以外の出席者は助手のドクター達とナース代表(通常は婦長)計20人程で、司会は日本では病棟主任の役目に当たるドクター(Oberarzt)がする。既に前日夕方のお返診やレントゲン検討会の時にそれまでのこと、患者の現況などは皆に徹底しているので、ここではそれ以降朝までに病棟で起こった出来事、集中治療室患者の目下の容態が報告される。そしてまた緊急入院の患者の病歴、神経学的所見を含めた全身状態の説明、CT写真、MRI写真の提示が当直医および病棟主任からなされる。それらを検討してそれぞれの患者の今後の治療方針を決める。またその日手術予定の患者(通常4~5例)の病歴、神経学的所見をCT写真、MRI写真を提示し知らせた上で、担当する術者が手術方法を説明する。余った時間で一般的連絡事項の周知徹底が図られる。またその前日行った手術のビデオも時々紹介して、手術所見、局所の解剖をも努めて説明するようにしている。このような内容を短時間だが集中的に詰め込んでいるこの時間は、若いドクター及び将来のドクター達(常時2人の医学生を臨床実習生として預かっている)にとっては大切な修練の場でもある。意見は誰でも気軽に言えるようにしているのだが、往々にして私の一人舞台になることがあるので注意している。

さて先日はこの場で、ある患者のケースをもとにして今回の主題について考えさせられることがあった。北部ドイツの都市から、脳幹に近接して髄膜腫ができて大きくなり仕事にも差し支えが出るようになったR医師(57歳)が、あちこちで聞き合わせた末に私のもとに手術を受けにきた。この部位のこの大きさの腫瘍摘出には特殊なアプローチがもてはやされ私もそれを試みたことがあるが、最近では小脳橋角に達するスタンダードなアプローチがよいと思っているので、その方法をとった。手術は難しかったが、予定通り4時間余りでうまく終わることができた。

しかし彼の場合も冒頭の主婦の例と同じく、術後の過程で思いがけない問題が続いたのである。まず原因不明であるが肺機能が悪く、麻酔のために行った気管内挿管の管をすぐに抜くわけにはいかなかった。肺機能を表す指標が回復して抜管できるまで、1週間弱かかった。そうこうしているうちに、集中治療室治療でしばしば見られる精神症状(ICUシンドロームと呼ばれる一時的精神異常状態)が出現

したり、CTやMRI写真の所見からは説明のつかない軽度の片麻痺が出てきたりした。このようにして手術成功にもかかわらず、予期していたよりも回復が遅れたのである。やがて彼は退院してドイツに帰国し、リハビリを受けた後最近完治して無事自宅に帰ったとの報告があった。このように医学の進歩した現代でも術後の予測できない、原因の説明のできない合併症は、まだまだありうるのである。

この医師である患者のことのほか長引いた治療経過に関連して、早朝連絡会の時に上記のタイトル、"Je le pensay, et Dieu le guarit." (われ処置し、神これを癒したもうた)という言葉を引き合いに出して皆に話した。外科医の手でどれだけうまく手術が行われたといっても、それはあくまで治療回復の前提条件であるということと話したのである。そしてこの言葉を残したフランス人の近代外科の父、Ambroise Paré(アンブロアズ・パレ、1510? ~ 1590)のことを皆が知っているかどうか質問したところ、居合わせたメンバーの誰もが知らなかったのである。私は驚くと同時に少しがっかりした。今日確かに、医師、医学生として学び、消化せねばならぬ情報量は膨大となっている。特に分子生物学、遺伝学の分野の発達を目を見張るものがあり、これを常時フォローするのは至難である。しかし、日夜、外科治療の最前線で働くメンバーが、16世紀の過去の人とはいえ外科の消毒法、止血、縫合、包帯法に大きな足跡を残したParéについて知らないのは、医学教育に不足があるのではないかと思った。

脳神経外科医になって長いが、それぞれの患者にベストを尽くして手術をした後には毎日一日も早い順調な治癒を期待する。しかし時には今挙げたいいくつかの例のようにさまざまな術後の展開や転機も経験することがある。Paréはこんな時に実感を込めてあの言葉を言ったのかなと思う状況に出会うのである。外科史上多くの功績を残した彼のこの言葉は、400年以上も後の今も臨床現場で生き続けていることを感じるのである。

司会をした当番の病棟主任は、早速Paréのことを調べてまとめ、翌日の早朝連絡会で全員に紹介してくれた。チューリッヒ大学医学部は医学史の講座を設け医学史博物館も完備して、医学の歴史を今に伝え後世に残す努力をしているが、我々がつい日常の忙しさに追われてそのフォローができていないことを思い知った次第である。

「星の樽職人」 フェリックス・ティスラン

ジャン・コラルド

上質のワイン、多種多様な風景、豊かな過去を物語るあまたの建造物ですすでに有名なブルゴーニュは、郷土の誇る学者や発明家の才能を通して、世の中を変革する役割も果たしてきました。そして私たちは今日、そうしてもらえられた進歩を享受しているのです。

その筆頭はニセフォール・ニエプスです。彼は1822年頃、シャロン=シュル=ソヌの近くで写真を発明しました。写真は近代メディア文明に必須の要素で、後年、映画、テレビへと進化していきました。

さらに北、ディジョンの近くに、治療効果の高いワインで有名なニュイ=サン=ジョルジュの町があります。ルイ14世のお抱え医師ファゴンは、この高名な患者に肉体ならびに精神の健康のためにとワインを処方したのです。その小さな町で、1845年、樽職人の親方クロード・ティスランの一家のもとにフェリックスという名の子供が生まれました。この子は後年、天文学者となり、「星の樽職人」というあだ名で呼ばれるようになります。

当時、樽職人はとても尊敬されていました。現に、彼らの仕事ぶりいかんで、樽に入るワインの保存の良し悪しだけでなく、さらに品質が向上するか否かが決まったのです。また、彼らの活動は樽作りだけにとどまりませんでした。井戸から水を汲み上げる手桶から、浴槽やたらい、大桶にいたるまで、液体を入れるためのありとあらゆる家庭用具、工業製品の製造にまで広がっていました。クロード・ティスランの場合は、ひたすらよいワインのためのよい樽作りに打ち込んだのです。

樽が発明されるまでは、ワインは素焼きのアンフォラ(※1)に入れて保存されたり、運ばれたりしましたのでうまく熟成しませんでした。当時の主要なワイン生産者であったギリシア人とローマ人は、そのようなワインを飲むに耐えるものにするために松脂や香草を加えざるを得なかったのです。さらに北の地方では、ケルト人、特にガリア人が森で暮らしていました。そこでは親方たちが材木仕事に駆り出され、材木を使ってあらゆる家庭用品を作っていました。そのような状況の中で、ある天才的な発明家が、漏れない、頑丈、扱いやすい、といった特性をすべて備えた木箱に液体を貯える方法を見つけました。これはおそらく一朝一夕にできたものではなく、改良に改良を重ねた結果でしょう。

今日では、ブルゴーニュのブドウ栽培者は、容積228リットルのほぼ

Jean Collardot / ジャン・コラルド

1925年、フランスのニュイ=サン=ジョルジュ市生まれ。69年から95年まで同市の文化・都市計画担当助役を務め、現在「ブルゴーニュワインの騎士団」長老。外国語、歴史、宗教哲学、デッサン、絵画について造詣が深く、7カ国語を解する。



完璧な容器を手に入れています。細長い形をしているので、移動しやすく、転がしたり、方向転換したり、輪木と呼ばれる一種の木製の梯子の上を転がしながら車に乗せたり、地下蔵に積み重ねることもできます。どうも、この樽は当初はワインではなく、ビールを貯蔵するために発明されたようです。ワイン用にこれを使うと、木を通して大気と交わるために年々味がよくなることに気づくのはずっと後のことです。

樽を作るには、ガリア式測定法に適った厳格な規則を守る必要があります。その測定法はメートル法とは無縁で、ゲージ(標準規)の形で親方から徒弟に伝承されてきたものです。

樽職人はまず、樽作りに必要な材木を手に入れなければなりません。それらを切り分けるのは彼の仕事ではなく、「メランディエ」という別の専門家の力を借ります。この樽板製造工は、樽の本体を形作ることになる側板を職人に供給します。側板は樹齢100年のカシの木から取れるものです。カシの木は筒状に切り分けられた後、引き裂かれます。この作業は大変な職人技を要します。というのも、鋸びきでは木目を大切にすることができないばかりか、火を使った曲げ加工に支障をきたす恐れもあるからです。そしてこの加工により、樽に反りが与えられ、胴と呼ばれる樽の最も膨らんだ部分が形作られます。こういった胴の特性には、地面と接する部分が少なくなるので、樽が転がりやすくなるという利点があります。それに、熟成のためにワインを貯蔵するときにそこに溜まる濃の集積部の役目も果たすることになります。

曲げ加工を行うには、組立中の樽のまん中で火をおこし、樽職人は鉄の輪をハンマーで叩きながらそのまわりを回り、反りの度合いを強めていくのです。続いて底を調整し、最終的な輪掛けを行います。最後に、樽にポンプで空気を送り込むことによって水密性のテストが行われ、漏れないことが確認されます。

こうして樽作りについて書いてきましたが、星はなんの関係があるのでしょうか。これについてお話ししましょう。若いフェリックスは、幼少の頃から父の仕事場に入出入りするのが好きでした。子供に力がついてくると親を手伝うのが当たり前の時代でした。学校の成績が優秀でしたので、彼自身いつか樽職人になるなどとは思っていませんでした。ところがこうした徒弟奉公によって、仕事を行ううえでの厳しさと正確さという原則が叩き込まれました。誤りなど許されず、



フェリックス・ティスランの像

犯せばただちに罰せられました。使用に適さない樽など作れば大目玉でした。

フェリックスは数学の教授資格を取得するほど勉強した後、有名な天文学者で当時のパリ天文台所長ル・ヴェリエの助手になりました。1873年にトゥールーズ天文台所長に任命され、74年には金星が太陽の前を運行するのを観測しに日本に赴きました。この事象の日付は、彼の師ル・ヴェリエの計算によって予測されたものでした。

樽の中央の火のまわりを回することで、彼は太陽を巡る惑星の公転のヒントを得た、あるいは樽を叩く木槌の音がビッグバン発見の前兆となったとまで言い張るつもりはありません。しかし直線を排した樽の曲線を見るにつけ、1896年に早逝してしまうまでの7年に及ぶ艱難辛苦の末、4巻の本を著すことで天体力学に残した彼の足跡を思い起こさずにはいられません。

彼の業績の一つでもある『天体力学概論』は今日でも影響力をもち、NASAの技術者はここから着想を得て、宇宙船の軌道の予備計算を行ってきました。パリ天文台にいたときに、写真を用いた月の図解の製作を決定したのもフェリックスでした。そのおかげで、この星の征服者たちはどこに最初の一步をしるしたらよいか知ることになるのです。

月の上を歩くことは、好奇心旺盛な人ならだれでも抱いてきた夢でした。しかしこの可能性は長いことSFの領域にとどまってきました。ジュール・ヴェルヌですらその冒険には乗り出しませんでした。彼は著書『月世界旅行』をしたためにすぎません。その中で彼は次のように描いています。「宇宙船を操縦していたアルダン船長は、夜の星(月の意味)の近くに到達すると、ニュイ(「夜」の意味ももつ)の瓶を開けた」。

フェリックス・ティスランに敬意を表してアメリカの宇宙飛行士がニュイ=サン=ジョルジュを訪れたとき、彼らにこの話が紹介されました。ところが、英語には翻訳できない語呂合わせ混じりの描写のため、彼らにはまったく理解されませんでした。それでも、月にもって行って欲しいと、市庁からニュイのワイン1ケースが彼らに贈られました。しかし輸送費がかかるためでしょうか、彼らはこのワインをヒューストンで飲んでしまい、実より名を取って、瓶のラベルを1枚だけ月にもっていきました。



Cratère ST GEORGE
(サン=ジョルジュクレーター)

NASAの写真資料による

そして彼らは感謝の気持ちを示すためにあることを実行しました。後に分かったのですが、アポロ15号の任務の際、月のクレーターに「サン=ジョルジュ(セント・ジョージ)」と書かれていたのです。ですから今日、はっきりと申すことができます。「ニュイ=サン=ジョルジュの名は、世界はあるか月にまで響き渡っているのです」と。

以上のような次第で、ブルゴーニュ生まれのしがたない職人の息子が、故郷の名声を月に届くまで高めたわけです。今日、市役所の前の広場は上述の次第でサン=ジョルジュ・クレーター広場と改名され、その中央にフェリックス・ティスランの像が立っています。

当地のワイン「ニュイ」の友人である月は、古来より夜ごと詩人や恋人たちに夢を見させてきました。そして世界中の言葉で月に詩が捧げられました。フランス語ではアルフレッド・ド・ミュッセ(*2)が、ロシア語ではカラムジン(*3)が、そしてベルシア語ではオマル・ハイヤーム(*4)が月について歌っています。また日本では、かの良寛も月に捧げる詩を歌っています。

しかし現代の詩人たちにとっては、月はもはやあまりに現実的すぎます。ブルゴーニュの2人の天才、ニセフォール・ニエプスとフェリックス・ティスランの業績にほかならない、新たな月のイメージは消し去ることはもはや不可能です。しかし私たちは樂觀視しています。ワインの杯の中をのぞけば、カラムジンが月を映してみせた有名な詩が蘇ってきますし、なによりも私たちの心の中には、未踏の広大な世界のイメージが今でも広がっているからです。

(* 1) 両耳つきの壺

(* 2) 1810 - 57年、フランスロマン主義の代表的詩人、劇作家。

(* 3) ニコライカラムジン(1766 - 1826年)、ロシアロマン主義の始祖の一人。小説家、歴史家。

(* 4) 1048 - 1131年。天文学者でもあり、ベルシアの世界で最も有名な詩人。

ブルゴーニュへ、ようこそ

中世がいまだに息づいているブルゴーニュへいらっしゃいませ。葡萄の結実を生み出すぶどう畑、グルメンタラの数々、中世そのものの街並み、美しく広がる大地や、小さな村々、豊かな生命力がはだのめり産する地方、それがブルゴーニュです。

お問い合わせ

(株)生多商会事務局 担当: 岩沢

Tel. 03 3582 5087

